

# 玉川の語源を探る夕べ

二〇一九年八月一七日(土) 一八時三〇分  
二子玉川ライズ原っぱ広場

玉姫を想う大青／画：月弧

<第一部> 18:30

玉川源流に伝わる玉姫伝承

神谷 博／法政大学兼任講師

<第二部> 18:50

創作神楽「玉姫」／珊月花

<第三部> 19:10～20:00

対談：玉川の語源と玉川文化

小野一之／府中市郷土の森博物館館長

小林ふみ子／法政大学文学部教授

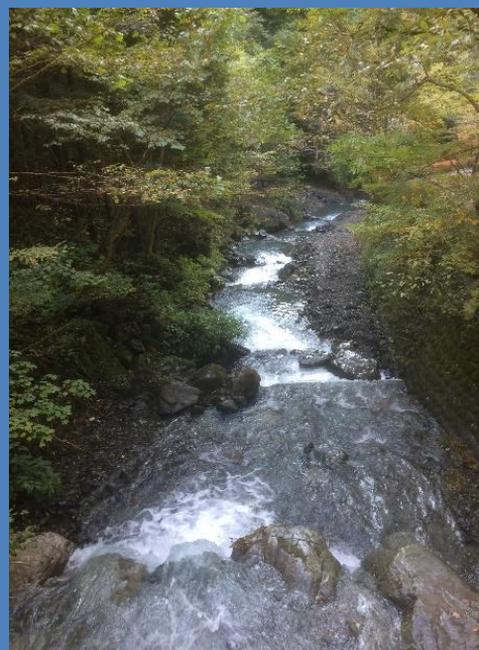
主催：法政大学江戸東京研究センター・エコ地域デザイン研究センター

協力：二子玉川ライズ

後援：多摩川流域懇談会

\* 入場無料、雨天強風等荒天時中止

\* 問合せ先：神谷 [suikei@jcom.zaq.ne.jp](mailto:suikei@jcom.zaq.ne.jp) 090-1429-4796



玉川(山梨県小菅村)

## 玉川の語源考

### 1. 多摩川の表記

万葉集の東歌に「多麻河」が見られ、同時代に下流部の丸子の渡しあたりは「石瀬河」とも記されており、上流には「丹波川」がある。多摩の語源は明らかでなく、「多摩の語源考」(鈴木樹造著)によれば、川の名が先にあって郡の名がついたとしており、多摩・タバ説や多摩・タマ説など多く紹介している。このうち、多摩・玉説では、霊、美しいもの、すぐれているもの、などの見方を紹介している。諸説あるものの、これが定説というものはない。

### 2. 調布玉川惣画図

江戸時代に玉川源流の記載が出てくるのは、関戸の名主であった相沢伴主による「調布玉川惣画図」である。天保10年(1839年)相沢伴主が玉川の源流を訪ねようと思い立ち、源流から河口までの下絵をつくり、これを絵師の長谷川雪堤が絵図に仕上げた。ここに小菅村の玉川が源流として記載されている。江戸末期であり、玉川という名は既に定着して多くの文化、文芸に登場している。

「調布玉川惣画図」の原型は、伴主の父である相沢五流が描いた「玉川勝蹟図」にあるといわれている。大田南畝(蜀山人)が文化6年(1809年)に玉川の堤防検分で関戸に来た際に五流に依頼したという。伴主は、五流の影響もあって玉川の源流を探る興味を持ったものと思われる。

伴主に少し先立つ1825年には、仲田惟善による「東都近郊図」が出版されている。江戸近郊が行楽の対象として人気となり、その案内地図として描かれている。ここには玉川について、「水源は甲州一ノ瀬といえる。幽谷より出でて、武州秩父郡の山水が落ち、多摩郡羽村あたりまでを多波川という。それより下を玉川という」とある。ここには玉川上水も描かれていて多波川は羽村までという認識ともとれる。伴主はこれとは別に玉川と名の付く源流にたどり着いており、羽村から先の多波川ではない川筋を遡り、玉川の源流を探索して小菅の玉川を突き止めたのであろう。

### 3. いつから玉川か?

鎌倉時代に東国政権が出来上がったが、ほどなく南北朝時代の混乱を経て、足利政権が出来上がった際には京都中心の時代に戻り、室町文化が栄えることとなる。これが家康によって東国政権の実現が果たされると、江戸が中心地となり、多摩川水系が重要な役割を持つようになる。多波川や六郷川、玉川など、地域ごとに違いう名で呼ばれていた川を武蔵国府の前を流れる玉川として家康の時代に一つの名前として統一して表記する必要が生じたのかもしれない。

民間ではどの範囲を、いつごろから玉川と呼んでいたのか。玉姫伝説に残る玉川は、池の平からの流れであることから、現存する小菅村の玉川であることは確かである。玉川上水が引かれたのは1653年のことであるから、このころには既に玉川であったことになる。玉川から分水したのであるから、取水した羽村の上下流も玉川だったといえる。

### 4. 六玉川の一つとして有名に

玉川が盛んに取り上げられるようになったのは、江戸文化が爛熟し始めて、江戸の文化を高めていこうという機運の中で清流としての玉川を売り出す意図もあったのではないかと。六玉川は、全国の代表的な清流として和歌の歌枕や浮世絵の題材となった。「山城井出の玉川」「近江野路の玉川」「摂津三島の玉川」「陸奥野田の玉川」「紀伊高野の玉川」と並び称して「武蔵調布の玉川」となっている。万葉集に歌われたのは「多麻川」にさらず手作りさらさら何ぞこの児のここだ愛しき」とあり、多麻川と表記されている。江戸時代にあって玉川と表記することを望んだとしたら、玉川であることに何らかの積極的な価値が必要だったからと思われる。

### 5. 玉姫の玉川

江戸時代の玉川下流部は六郷川であり、六郷用水は家康の初期の江戸づくりにおいて重要課題だった。江戸初期にはまだ下流部が六郷川、中流部が多麻川、上流部が多波川だったと思われる。江戸後期の相沢伴主の時代には、それが小菅村から河口までを玉川と記載するようになっている。玉川は、多摩川の美称として玉石が多くて清流であることから後世に呼び替えられた、という説もあるが、近年に玉姫伝説という民話が発掘されたことから、玉川の語源は小菅の玉川であり、その名は玉姫からとられたという説も成り立つと思われる。

神谷 博

### 【講師プロフィール】

小野一之 府中市郷土の森博物館館長

中央大学大学院文学研究科前期博士課程修了

専門は日本古代史。著書に『武蔵府中くらやみ祭』他。

小林ふみ子 法政大学文学部教授 法政大学江戸東京研究センター一研究員

東京大学文学部国文学科卒、人文社会系研究科博士課程修了。大田南畝

『七観』をめぐって一詩文と戯作』などで日本古典文学学会賞受賞。文学博士

神谷 博 法政大学兼任講師(環境生態学) 建築家 景観アドバイザー

法政大学建設工学科修士課程修了 法政大学江戸東京研究センター・エコ地域

デザイン研究センター 客員研究員。多摩川流域懇談会運営委員長



### 【演者プロフィール】

珊月花/ハナヲ、月弧、さんご による神楽ユニット

ハナヲ/ 東京藝術大学卒 雅楽、現代音楽、作曲、編曲

月弧/ ネイティブアメリカンフルート奏者、作詞、作曲

さんご/ 舞踏家 Sango Saria ベリーダンス 占い

映像協力 織田理史 総合プロデュース はるく

### 【会場案内】

東急田園都市線・大井町線「二子玉川駅」下車  
二子玉川ライズ・ルーフガーデン5階 原っぱ広場  
蔦屋横のA1エレベーターでアクセスできます

## 玉姫伝承

その昔、甲州と武州の境を戦に敗れて鎌倉を目指して落ち延びる玉姫一行があった。

難儀する一行は小菅で村人にかくまわれた。

旅を続ける間に、玉姫は一心に尽くす家来の若者の大青と想いあうようになった。

ある日、追手に追いつかれ家来たちは斬られ、玉姫と大青は池に身を投げた。

すると玉姫は大蛇となり大青は狼となって追手を噛み殺した。

二人はその地で仲良く暮らしていたが、ある年の大雨で池は壊れ、大蛇は流されてしまった。

狼となった大青は後々の時代まで玉姫を想って泣き続けたという。

この大蛇の流れた川は玉のように流れる清流で將軍様に献上した名水だった。

そしてこの川は玉姫の名を取って玉川と呼ばれるようになった。(要旨)

この物語は、山梨県小菅村余沢の横瀬家に鎌倉初期から口伝で伝えられてきた。

玉姫の父親は畠山重忠とされている。

玉川の語源説に新たな視点を与える伝承である。



玉姫神楽/珊月花